

ところで、私は「おかえり、ヨコハマ」展の「ヨコハマ」が、なぜカタカナで表記されているのかについて、一つの仮説を立てた。「ヨコハマ」とは、ただ単純に横浜市を指しているのではなく、いつからどこからだから、多様な視点から見たこの場所が「ヨコハマ」であると考えた。

4 私、今回鑑賞した作品の中で最も感動したのは、「新収蔵作品特別展示——浅井裕介

《八百万の森へ》(二〇二三)という作品である。この作品は、横浜信用金庫が創立100周年の記念事業として、二〇二三年に横浜市文化基金に寄附を行ったことをきっかけに制作され、横浜美術館に収蔵されたものだというのである。横浜市内各所の土を絵の具として使用し、九枚のパネルを組み合わせたこの作品は、高さ約三メートルもあり、圧倒的な迫力と存在感を放っていた。

土が使われているからなのか、《八百万の森へ》は強い生命力を感じる作品だった。見ているだけなのに、まるで自分が絵の中に入り込んでしまうような、このままこの空間から動けなくなってしまうのではないかと思わされるほど、一目見た瞬間から作品に引き込まれた。

この作品は九枚のパネルで構成されているので、組み合わせのパターンが七種類も存在するそうだ。今回見たのは、その七パターンのうちの一つだけだが、他のパターンによってはまた別の見え方、感じ方になるのだろうか。どう組み合わせるかで絵が変化するという点が、刻一刻と変化する自然そのものを表しているようにも感じた。

今回の美術館の鑑賞では、多くの刺激を受けた。この経験を自分のこれからに活かしていきたい。

5 「おかえり、ヨコハマ」展は、私たちに馴染みのある土地である横浜の過去について、視覚的に知る経験を与えてくれた。

かつての横浜で培われた文化と人々の営みが、私たちの生きるここからの横浜をさらに魅力的な街へと育んでいくことを願いたい。



島川ゼミナール 軍艦島に見る 産業遺産と観光の未来

——長崎研修レポート——

国際日本学部 国際文化交流学科

観光文化コース 島川崇ゼミナール

私たち島川ゼミナールは、観光業界や公的機関において、地域の魅力を発信し、持続可能な観光を支える人材の育成を目指して日々活動を続けています。ゼミでは「旅行業および集客施設の企画と運営の実践的アプローチ」というテーマのもと、旅行会社やディベロッ

パーと連携したプロジェクト型の学習を重視し、教室を飛び出した実地体験を通じて、実務感覚を養っています。

2025年度の取り組みの一つとして、箱根・強羅にある函嶺白百合学園高校2年生の修学旅行における長崎での自由行動プログラムの企画・提案を行っています。この実習では、受け手である高校生にとって「学びのある体験」を提供することが求められるため、私たち自身が現地を訪れ、体験に基づいた企画を立案する必要があると考えました。そこで、ゼミ生有志で2泊3日の長崎研修旅行を実施することとなり、その目玉として選んだのが、近年国内外の注目を集めている世界遺産「軍艦島(端島)」の訪問です。

◆産業遺産の象徴、軍艦島へ

長崎港から南西約19kmの海上に浮かぶ端島、通称「軍艦島」。かつて海底炭鉱で栄え、最盛期には東京以上の人口密度を誇ったこの島は、昭和49年(1974年)に閉山し、無人島となりました。現在では、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつとして、製鉄・製鋼・造船・石炭産業の近代化を物語る貴重な文化遺産として保存されています。

軍艦島という名前は、島の外観が戦艦「土佐」に似ていたことから名付けられたものです。海上から見るその姿は、まさに鉄とコンクリートの要塞のようで、私たちのような観光を学ぶ学生にとっても圧倒的な存在感を放っていました。

訪問にあたっては、事前に世界遺産の意義や日本の産業近代化の歴史についての学習を行い、ただの「物見遊山」ではなく「学びの旅」としての準備を整えました。当日は、株式会社シーマン商会様が運営するク

ルーズツアーに参加。午前10時30分、長崎港を出発し、約40〜50分の船旅が始まりました。

◆上陸のハードルと学び

軍艦島への上陸は、天候や海象条件に大きく左右されます。具体的には、風速が5mを超える場合、波の高さが0・5mを超える場合、視程が500m未満の場合、あるいは船長が安全に下船できないと判断した場合は上陸が許可されません。実際、出航しても島に近づいてから上陸中止となることもあり、年間で上陸できる日はおよそ100日程度にとどまります。

私たちの訪問日は、幸運にも条件を満たし、上陸の許可が下りました。ただし、上陸後にもいくつかの制約が設けられています。例えば、安全確保のために建造物からは常に約80m以上の距離を保って見学する必要があります。日傘や雨傘の使用も一切禁止されています。これは、万が一の事故やけがに備えて緊急対応が難しい環境であることから、見学者の安全を最優先とした措置です。

島内はすべてがコンクリートに覆われており、影となる場所がほとんどないため、日差しの強い夏季は特に厳しい見学環境となります。それでも、倒壊の進む建物の姿や、そこに残された生活の痕跡を目の当たりにすることで、教科書では得られない深い実感と学びを得ることができました。

◆観光に求められる「心配り」

クルーズ中は、専属ガイドの方が軍艦島の歴史、かつての住民の暮らし、島の役割などを写真や実例を交えて丁寧に説明してください、移動中も学びの時間が続きました。また、「明治日本の産業革命遺産」に含

まれる三菱造船所をはじめとした周辺施設についても解説があり、産業遺産としてのつながりを俯瞰することができた点は非常に有意義でした。

さらに印象的だったのは、ツアー運営者のサービスのきめ細やかさです。島内で日傘の使用ができない代替として麦わら帽子を貸し出すほか、見学後には冷たいおしぼりを全員に配布するなど、乗船客のニーズを先回りした心配りが随所に見られました。特に暑さに疲れた体に冷えたおしぼりはありがたく、思わず「また利用したい」と感じさせるおもてなしの力を目の当たりにしました。

◆軍艦島が教えてくれたこと

私たちゼミ生のほとんどが、今回が初めての軍艦島訪問でした。実際に訪れてみて初めて感じる空気や景色、そして静けさの中にある廃墟の存在感。それは、文字や映像だけでは到底伝わらない「現地のリアル」でした。

建物の崩壊は今なお進行しており、見学できる範囲や状態は時間とともに変化しています。今日見た風景は、明日にはもう見られないかもしれない。軍艦島は、まさに「時間とともに消えゆく記憶」を私たちに見せてくれる場でもあります。その儚さが、よりいっそう歴史の重みと尊さを感じさせてくれました。

また、今回の体験を通じて、観光地における安全基準の重要性、文化財を守るためのルールの意味、そしてそれらを理解しようとする訪問者の意識の必要性を強く感じました。単に「見る」だけでなく、「守る」「伝える」立場になったとき、観光の意義は大きく変わります。今後、観光を企画する立場として、自分自身がどのような責任を持つべきか、改めて考えるきっかけ

となりました。

◆最後に

今回の軍艦島訪問は、私たちにとって単なる見学ではなく、歴史・観光・教育・サービスといった多面的な学びを含んだ実践の場でした。そして、島内を歩いたあの時間が、将来、観光を担う私たちの「原点」となっていくような、そんな確かな感触を得ることができました。

今後も島川ゼミナールでは、現場での体験を大切にしながら、「観光」を学問としてだけでなく、人々の心を動かす文化として探究していきます。



最も軍艦らしく見える場所からの軍艦島（端島）と島川ゼミメンバーと島川先生・島田先生

ウェルカーゼミナール
学外実習

(秋葉原・米沢嘉博記念図書館)

国際日本学部 国際文化交流学科3年

糸谷 蓮華・多宮 壮太郎・柳井 歩乃佳

◆アキバについて

私は、秋葉原といえば「アニメ文化の街」というイメージを持っていましたが、実習で先生の話聞き、